資料１

学びを通じた地域づくりの推進に関する調査研究協力者会議（第３回）資料

# 新居浜市の公民館を中心とした社会教育の現状と課題

新居浜市教育委員会　教育長　関　福生

## １．これまでの経緯

**地域主導型公民館を目指して公民館運営をすすめる。　Ｈ２０年度から４年で**

・公民館の原点回帰　～郷土を興す喜びは自らの力で～
　主人公は地域の住民　「公民館」はその活動を支援する機能
　目指すは「市民参加」ではなく、「行政参加」の公民館活動

・一度にすべてを変えるのではなく、段階的な転換
　護送船団方式ではいつまでも変化できない。モデル・ベンチマーク方式で対応
　イノベーターは、４/１８　最後は２館で完結（地域風土の差は大きい）

・課題解決型の公民館指向
　何が地域にとっての課題なのか？　現状分析と熟議（話合うことの欠如を実感）
　最初はギクシャク、いつの間にか当たり前の風景に
　先進的な地域に学ぶ機会の拡大　ゼロからのスタートは困難　真似は恥じゃない
　相互交流が大きな縁をつなぎ、活動が拡がり、深まっていく。

・人材育成　地域主導型公民館の職員の資質向上と住民リーダーの発掘と支援
　プロフェッショナルとしての公民館職員
　社会教育主事講習の受講　公民館主事は国社研のインターネット配信で受講

## ２．現在の公民館活動の特徴を示す活動

**（１）マイナス、それも極端な状況が新しい活動の引き金になった。**

中途半端な状況からは変化は起こらないのかもしれない…

①　学校が荒れ、どうにもならない状況に　→　学校支援地域本部
②　新しい道路が地域を分断し、雑草が生い茂る　→　国交省とのアダプト
③　全国ワースト１０内の介護保険料負担　→　健康寿命延伸プログラム

すべて一過性のものではなく、継続的なものに発展
モデル的な事業に文科省や国交省の事業を活用することの意義

**活動がきっかけになり、地域風土が変わっていくことを実感**

・子ども達に対する地域の人々の目線が優しくなった。
・小中高生が地域の一員として活動にかかわってくる。　ＥＳＤパスポート
・道路を地域共有の宝となす。　市の玄関を美しくする自覚
・花いっぱい運動の定着　ＰＴＡから校区みんなの活動に

資料１

・老人会組織の活性化　仕事があること　→　人生の張り合いに
国体に向けてのまち美化活動　無償ではなく対価提供→身近な老人会活動に活用
「キョウイク」と「キョウヨウ」を持った高齢者が健康寿命を獲得する。

（２）地域に眠っている宝を発見し、磨き上げる活動　シビックプライド

①　新居浜南高校ユネスコ部　　別子銅山を素材に
ＨＰ作成　→　人との出会い　→　自らが教え手に　→　新しい学び
高校の３年間にアクティブラーニングで変容する子ども達
地域全体で高校生の学びを支える仕組みが出来上がる。１７年の歴史
高校生が地域に溶け込む、自ら出向いていくことが存在感を高める。

②　多喜浜塩田の文化を地域と学校の協働活動で継承する。
学校と公民館の連携が地域そして諸団体を巻き込む活動になる。
小学校内に住民手作りのミニ塩田（ソルティ多喜浜）設置　→塩田学習館も
学校長が立案し、地域関係者が賛同し動き出した活動
子ども達が塩田文化の語り部として活躍　ＥＳＤのモデルになる。
子どもが副産物を生み出す。（ラスク・サイダー・ゆるキャラ・踊りなど）
地域の精神“かしょい”相互扶助・協力を地域づくりの核に据える。

（３）地域の将来の夢を描き、何をなすべきかをみんなで考え、実践する。

戦略のない地域づくりからの脱却
何のために活動するのか？何にたどり着きたいのか？
ヒト・モノ・カネは有限、情報は拡大、優先順位をつけてどう活かすか？
場当たり的、前年度踏襲主義は卒業したい。
→　熟議の場をシリーズで展開する。話し合いで合意（納得）を生み出す。
　　時間軸を明確化することと自助・共助・公助の役割分担ルールづくり
→　推進のための新しい組織づくり
　　社会教育関係団体・行政おかかえ団体の弱体化　再構築の時期では…
　　キーワードは、地縁団体と目的団体の融合

①　高津まちづくり構想・実施計画の策定
１年数か月の期間をかけて、じっくり地域の将来を語り合う場を設定
価値観が異なる人が、他者の考えを時間をかけて納得していく機会
構想　→　実施計画　→　実践　　それぞれのフェーズには壁が存在

②　泉川まちづくり連合自治会
課題解決型組織（まちづくり協議会）＋コミュニティ組織（自治会）
地域を良くしたいという共通理念　公民館も同じ　→　総合事務局機能

資料１

## ３．現状の課題

### （１）自前主義を脱却するための処方箋が必要

社会教育担当課は社会教育領域を限定的にとらえる。予算主義・拡散回避
首長部局は、公民館等の存在意義を理解していない。
縄張り根性をどうすれば協働に切り替えていくことができるのか？
成功体験の欠如が課題　→　よかったと思える体験談を語る必要
社会教育の醍醐味は「つながり」が生み出す相乗作用ではなかったのか。

### （２）学び（真似び）の不足　あるいは回避の克服

自分たちの世界で安住、自己満足の傾向が大　　「井の中の蛙」状態
武者修行の大切さ　そこでの出会いが新しい事業を生み出す。創発
①　学校と公民館（地域）の関係が変化しているのに…
　地域学校協働本部・放課後の居場所など　全国の先進事例は多いはず
②　公民館の事業　　過去の成功体験や評価に甘んじては成長しない。
　全国大会などへの参加・研修予算の減少

### （３）社会教育の人材確保と成長の支援

現在の公民館職員の雇用形態のジレンマ　地公法・市人事の認識
（正規の３/４以下の勤務時間、超過勤務手当支給×、任用期間制限）
社会教育そのもののジレンマ　（職員と住民の立ち位置）
社会教育職員のプロフェッショナル意識とは何か？
「悪貨は良貨を駆逐する」ではなく「薫習の文化」をつくる。
よき人材は、成功体験や失敗体験の中で育っていくもの　場の提供

### （４）教育委員会と市長部局の新しい関係性の構築

特に注目は「公民館」、スポーツ・文化も
行政の課題はすべて地域社会の課題でもある。地域への浸透は公民館で
市役所　⇔　公民館　⇔　自治会館　　学びの三層構造
行政全体の社会教育化を指向するべきではないか。
仮に、首長が公民館を自らの所管にしたいのならば、存在意義を認めていること
→むしろ肯定的に受け止めて、生き残りのための変革も必要な時期ではないか。

**★そのための対話、協議を重ねることこそが真の社会教育の学びの場なのかもしれない。**